

災害と移植医療

～ そのとき何が起こった！

あなたの施設はどうする？ ～

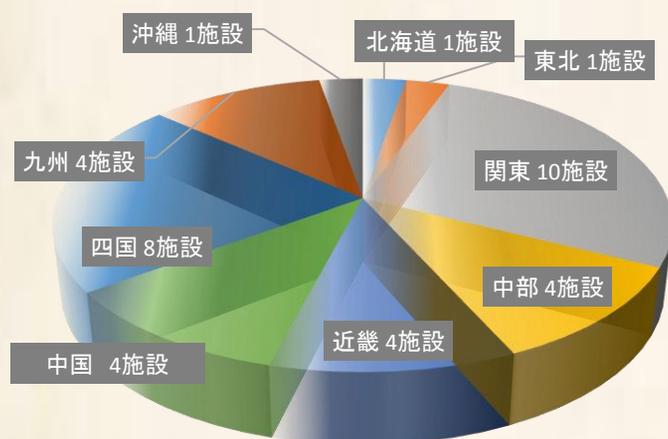
10/28(土)

10:00～12:05

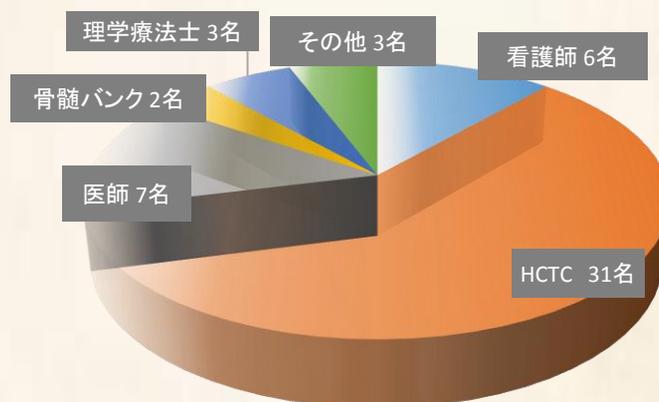
開催報告

開催方法：Zoomによるオンライン開催
参加者：52名 参加施設：37施設
ブロックを越えて多くの方々にご参加
いただきたく、オンラインで開催いたし
ました。

参加施設



参加職種



熊本地震から得た教訓

～救急病院の医師、血液内科医、そして父親として～

国立病院機構熊本医療センター 血液内科 河北 敏郎先生

2016年4月に発生した最大震度7の熊本地震の経験から得た教訓についてお話していただきました。

救急病院の医師として感じた「事前訓練の重要性」や「各種ライフラインが停止した場合のマニュアル」「医療・病院連携の重要性」や「職員・家族の支援」の必要性。そして地震当時、移植前後の患者さんを含めて70～80名の患者さんを実働5名の血液内科医で対応して感じた「他施設の状況を把握しながら臨機応変の運用（医療体制）」や「管理者に業務が集中しない体制」「各個人に応じた業務負担の調整」や「病院間の被害状況に応じた人材調整」の必要性など、施設内だけではなく、施設間の連携を図る重要性についてのお話を伺うことができました。

また、医療者と父親の二つの立場の狭間で抱く葛藤なども伺うことができ、私達の教訓となる大変貴重なお話でした。

東日本大震災を振り返って今考える事

～移植医療の現場から～

福島県立医科大学附属病院 HCTC 安齋 紀先生

2011年3月に発生した東日本大震災と、福島第一原子力発電事故における医療現場での経験を振り返り、医療者として感じたことをお話してくださいました。

震災時は3名の移植が予定されており、既に前処置が開始されていた患者さんもおられました。医師・看護師・骨髄バンクの職員の方々の患者さんを助けたいという強い思いとチーム力で無事に乗り切ることができたそうです。経験を振り返り「災害時は日頃のチームワークが発揮される」「災害時にも平常心を持つことが患者の安心につながる」「災害時には（その役割に）こだわらず柔軟性を持って対応」「医療者の周囲の安全があってこそ」とのお言葉がありました。

報道では知り得ることができない医療現場の状況を伺うことができ、胸が一杯になりました。

東日本大震災を経験して

～ドナーコーディネートの立場から～

(公財) 日本骨髄バンク

東北地区 骨髄バンクコーディネーター 川村 浩子先生

渡辺 伸子先生

ドナーコーディネート部

中尾 るか先生

2011年3月に発生した東日本大震災時の骨髄バンクコーディネーターの方の対応と、骨髄バンク中央事務局の状況及び、今後災害等により中央事務局が対応不可能になった場合の対策についてお話くださいました。

コーディネーターの方ご自身も被災する中で、強い使命感を持ってドナーの皆様の安否確認を行いその先に繋いでくださったことや、バンク職員の方が骨髄液の搬送経路の確保に尽力され、自ら運搬してくださったことなど、お一人お一人の志の強さに強い感銘を受けました。

医師、看護師、HCTC、骨髄バンクとそれぞれ立場は違いますが、患者さんやドナーさんを思う気持ちや、移植に携わる者としての志は同じであり、その思いや志が繋がると窮地を乗り越えることができると強く感じました。

講師を務めていただいた先生方、ご参加くださった皆様、セミナー開催にご協力していただくにあたり、辛い記憶が蘇ってしまった部分もあるかと思いますが、ご協力、ご参加いただき誠にありがとうございました。

次回のセミナーも、ご都合がよろしければご参加いただけますと幸いです。

造血幹細胞移植推進拠点病院
愛媛県立中央病院